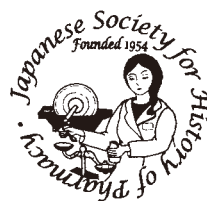


薬史レター



第 58 号

日本薬史学会

J S H P

2011年1月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

2011年の総会および年会の日程

日本薬史学会総会 4月16日(土) 東京大学薬学部総合研究棟

日本薬史学会年会 11月12日(土) 名古屋市金城学院大学薬学部

本年4月の総会講演は津谷副会長、川瀬名誉会員、山川会長のお世話で、中国の医薬史研究者との交流が企画されています。3月発行の次号で詳細をお知らせする予定です。

日中薬史学交流に思う

川瀬 清

本学会が、日中両国・薬史学分野での交流を企画されている旨伺ったので、明治以来の動向を点描してみたい。

明治開国以来、幾多の薬学留学生の来日を見ていたが、何と言っても第一の項目は、中華薬学会が東京の地で産声を挙げたと言う事であろう。時は1908(明治41)年秋、場所は東京神田・水道橋、中華料理店「明楽園」。筆者は二十数年来、その他の確認などを依頼されているが、関東大震災(1923)・米軍の空襲(1945)などでの破壊が甚大で、不明の事項が多く、未だその課題は解決されていない。今日、多数の中国留学生が居られるので、ご一緒してこの大事を果たしたく思っている。

次の項目は、日本植民地政策時の交流による功罪であろう。財団法人同仁会の結成(1902)、特に東京同仁医薬学校(牛込西五軒町)については検討されていない。また満鉄(南満州鉄道株式会社)特に同調査部、傘下の中央試験所については、日中共同の研究が特に必要である。上海自然科学研究所・薬学領域の歴史も課題となろう。

日本敗戦時以降は、両国国交回復前後で大きく区分されよう。

1972年以前の薬学交流は、主として中国産生薬の買い付けが目的の、広州交易会に参加する形での人的交流によって、中国の様子が細々と日本に入ってきていた。その後1955年、中国科学院学術視

察団員・辟愚・北京医学院薬学主任教授の来日、東大での講演と中国薬学会よりのメッセージ手交が皮切りとなって、少しく両国薬学交流の道が開けた。1962年秋には、高橋真太郎(阪大)・竹本常松(東北大)が、日本学術会議第7部組織の「訪中医学薬学交流代表団(中華医学会招待)」として訪中。1963年秋には、鑑真和上円寂1200年記念大会に長沢元夫(名城大)が、1966年夏には日本伝統医学交流代表団(中華医学会招待)として筆者(東京薬大)がそれぞれ訪中している。

日中両国国交回復(1972年)以後はまず；

1980年春「今日の中薬展」と題する催しが、日本各地で開かれ、中国中医研究院・中薬研究所より、責任者として章国鎮研究員、更に章榮烈教授が来日された。とりわけ、章榮烈教授は格調高い日本語を通じて、学術研究・教育・医療・交易など両国各界の公的交流に多大の貢献をされた。

1987年秋には、「日中国交回復15周年記念・第1回日中東洋医学会議」が東京・三田の笹川記念会館で開催され、それ以後は、日本各地・各界で、多彩な両国交流が実現され今日に及んでいる。

東アジアでの薬史学の交流

津谷 喜一郎

2007年4月の本学会総会でソウル大学薬学部の沈昌求氏(元KFDA長官)を招聘し韓国の薬学史を講演していただいた。これが一つの契機となり、本学会会員による韓国の近代薬学史の研究も盛んになり薬史学雑誌にこれまでに計9本の論文が掲載された。現在それらを合わせて簡易製本し関係者に配布する計画を立てている。また2008年には奥田潤理事らによる韓国薬史学ツアーが実施され(薬史レター2008年5月号)、2005年に設立された東アジア近代薬学史研究会(<http://jku.umin.jp/>)も運営されている。韓国にはまだ日本薬史学会のような学会や研究組織は存在しないようだ。

2010年は1910年の韓国併合から100年目に当たっていた。上記の研究も多くは日本統治下の薬学や薬業の歴史の研究となる。帝国主義と科学の研究は1990年代から盛んになりこれらもその一環ととらえることもできる。ただこれまでのところ朝鮮半島が主で、旧満州、中国、東南アジアなどの研究はまだ未開拓である。

そろそろ中国でなにかコンタクト先がないかと考えていた時に昨年4月の理事・評議員会の折、真柳誠評議員からそれらしきものがある、鄭金生(Zhen Jinsheng)氏が中心人物であると教えていただいた。さっそく連絡してみると、彼は研究でベルリンに滞在していた。また2009年まで10年間、中国薬学会薬学史専門委員会の主任委員をしていたが、現在の主任委員は郝近大(Hao Jinda)氏であるとのことである。

昨年5月に別件で北京を訪れた際に、中国中医研究院にあるこの委員会の事務所で郝氏にお会いし、活動の概況を聞くことができた。この委員会が中心となって作成された『中国薬学会百年史』(中国人口出版社、2007)という立派な本をいただいた。見ると驚いたことに、中国薬学会は1907年に東京で設立されたとある。また当日同席された同研究院中国医史文献研究所の肖永芝(Xiao Yongzhi)女史は日本語を話す。川瀬清名誉会員の世話で1997年に数か月日本に滞在したとのことである。その際は「井戸を掘った人」という1972年に日中国交回復がなされたときによくつかわれた言葉を思い出した。

日本薬史学会として「医薬史蹟を訪ねる旅」としてヨーロッパ・ツアーがなされていたことは知っていた。その後、山川会長から、1996年10月に中国の北京・杭州、西安、成都、上海へのツアーが

医薬史蹟を訪ねる旅・中国としてなされていたことも知った。

川瀬清, 山川浩司, 高橋文. 第5回医薬史蹟を訪ねる旅・中国. 薬史学雑誌 1996; 31(2): i-iv.

山川浩司. 人間と医薬-中国医薬史散歩 1, 2-. Pharmavision 1998; 2(8): 13-6, 2(9): 13-6.

ただし、その後 10 数年間は日中の薬史学の分野での交流は途絶えていたようだ。この間、日中関係は大きく発展するとともに課題も明らかとなってきている。このような時期に歴史をもう一度認識することは重要である。

現在、2011 年 4 月 16 日(土)の日本薬史学会総会後の公開講演会で、上記の中国薬学会薬学史専業委員会委員長の郝近大氏を招聘して講演していただく計画が進行中である。これを機会に、韓国のみならず中国とも薬史学の分野での交流と研究がより盛んになってもらいたいと希望している。

日本薬史学会 2010 年会聴講報告

末廣 雅也、川瀬 清

日本薬学会年會に薬史学部會が設置されて講演形式による発表が永いこと定着していたが、1999 年の徳島での年會以後、一般演題はポスターによる発表となったので日本薬史学会としては独自に講演形式による会員の研究発表の場が必要となり、2001 年 11 月 10 日に日本薬史学会年會を東京理科大学薬学部で開催した。爾來、総會は春、年會は秋というパターンが定着した。

山川會長が講演要旨集の第一頁に“十年ひとめぐり”と記されたように、今回、東京理科大学で再び年會が開催されたが、この間に東京理科大学では 2003 年 4 月に薬学部が野田キャンパスへ移転したので、年會事務局の先生方は研究室所在地と離れた会場での準備、運営となり、何かと氣遣いが多かったことと推察し感謝する次第である。

特別講演 1 は東京理科大学薬学部講師の和田浩志先生による「薬学の眼でシーボルト関連の種子・果実標本を検証する」であった。

1823 年(文政 6 年)オランダ商館医として出島に着任したシーボルトは飽くなき好奇心で日本の文物、風俗、植物を採求、蒐集した。1828 年に帰国命令を受けたシーボルトの荷物を積んだオランダ船は台風で襲われて港内で難破して禁制品を持ち出そうとしたのが発覚した。長崎奉行所はこれら禁制品を押収し、尋問の末、シーボルトは国外追放の判決を受けて、1829 年 12 月に出島を離れてバタビアに向かったが、禁制品以外のコレクション、動植物標本、植物を持ち帰ることは許された。

ライデン国立植物標本館にはシーボルトとその協力者が収集した植物標本(種子植物、藻類、地衣類、シダ類を含む)約 12,000 点が保存されている。これらの標本は同博物館の館長であったミクセルによって 1870 年までに標本目録としてまとめられた。今回の特別講演に関連する種子・果実標本は 442 点であった。それ以後もオランダの研究者や日本の植物分類学者がそれらの同定を行ってきた。

通常、植物の標本は茎、葉、花を伴った物で作



られ、時に根、果実を伴った標本もある。種子や果実は、花、茎、葉に比べて形質に特徴が現れにくいので、分類学者の手がつかないままとなっていたと思われる。演者らが1998年に同館を訪問した際にこれらの同定を依頼されたことからこの研究は始まった。

すべて歴史的に貴重な標本なので、その一部たりとも研究資料として手を加えることができないので、生薬商品を見てその原植物を探り出す生薬学的手法に依らざるを得なかった。まず個々の標本を実体顕微鏡で観察して、演者自身の経験および日本種子図鑑をもとに、その基原をある程度予測することから作業をはじめ、対応するシーボルトの果実付きの押し葉標本を探し出して比較するなどの手段を講じた。2001年までは毎年2週間ほどの現地滞在でこのような作業を行って来たが、幸い、2004年9月から2005年8月までライデン大学留学の機会を得て仕事が捗り、種子・果実標本全体の8割以上を確定し、なんとかその全体像を明らかにすることが出来たと述べられた。

特別講演2は遠藤次郎(東京理科大学元教授)、鈴木達彦(北里大学東洋医学総合研究所)両先生の「丸散方から湯液方へ」と題して中国、日本の伝統医薬学の世界で用いられる剤型 — 湯・散・酒・膏・丸 — などの来歴、相互関係などについて考証の展開を述べられた。まず「千金方」「傷寒論」中の医論に着目し、名医「華佗」による古い医術では、丸・散方が病邪排泄に、湯液方がその後の養生、または衰弱回復に用いられているのに対し、それより後世の「傷寒論」では、「発汗や瀉下の目的には散方より湯液方が優れている」と論じているのを論拠に、演者らは、中国の古い時代に、先づ丸・散剤を与えるという治療体系があり、これを否定する立場として「傷寒論」が成立したのではないかという新説を展開された。

そして具体例として、古い時代の附子・烏頭を用いた発汗処方を変えて、桂枝を主薬とする発汗処方が提示されたとして、毒性の強い「生(なま)」の生薬の服用から、緩和な薬剤を組み合わせる治療効果をあげる湯液方へと変えていった歴史として、この間の経緯をみることができよう、と述べられた。

一般演題

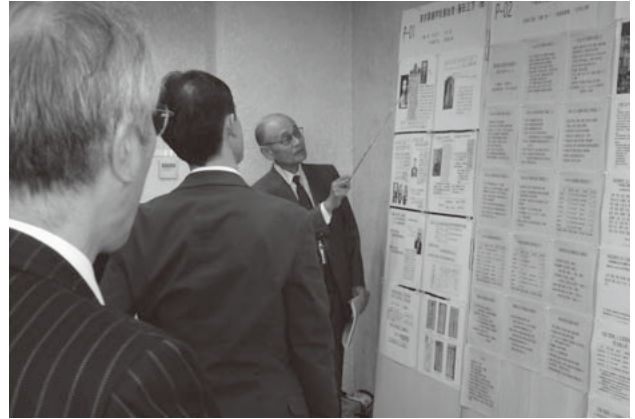
- O-01 三澤美和氏(星薬大薬理)は薬学概論などの講義で、星薬大の創立者星一が星製薬を設立した当初より社員の教育を開始し、企業経営と併せて、“ほんとうの人”をつくる大学の設立を目指して、「親切第一」を建学の精神としたことを語り伝えていることを話された。
- O-02 石田純郎氏(中国労働衛生協会)は日韓併合中に京城、大邱、平壤の医育機関で薬理学の教鞭を執った医師、薬剤師13名についての集団履歴調査法的検討の結果を発表した。
- O-03 山本郁男氏(九州保健福祉大薬学部)ほか3名は、日向国延岡より頼山陽を慕ってその塾に学び、後に医師になった新妻金夫と山脇東洋門下はやかわづしよの早川図書は帰郷後、延岡の医学所「明道館」の創設者となったと報告した。
- O-04 柳沢波香氏(青山学院大、津田塾大)はアポセカリーについての第三報として、アポセカリーの父親から徒弟教育を受けてアポセカリーとなったジョセフ・アダムズ(1756-1818)の業績を紹介した。彼はロンドンの病院で一流の外科医の指導を受けた後、1795年 Morbid Poison を刊行して、翌年アバディーン大学からMDの学位を授与された。マデイラ諸島で診療と薬草の研究を精力的に行き、1805年ロンドンに診療所を開いた。1809年 Royal College of Physicians より会員の資格を特別に与えられた。
- O-05 寺岡章雄、津谷喜一郎両氏(東大)は明治以来、薬学の教育・研究は実験科学を主体とすることを伝統としたが、医薬品の管理制度あるいは社会的側面の教育・研究には必ずしも実験室は必要ではない。演者らは近年の薬科大学の状況を調べ、総合科学としての薬学を「基礎薬学」「医療薬学(臨床薬学)」「社会薬学」に分類することを提唱した。

- O-06 荒井裕美子 (財日本医薬情報センター)、松本和男 (京大化研) の両氏は 20 世紀後半より開発が目立つようになったペプチド製剤で非天然型アミノ酸を組み入れたものも実用化されていることを例を挙げて説明した。
- O-07 荻原通弘氏、遠藤次郎氏 (日本薬史学会) は今日では不明なことの多い明治初期の売薬許認可について荻原氏所蔵の宮城病院『検薬要務録』の写本を手掛かりに調べた結果を報告した。
- O-08 西谷潔 (東京理大・薬)、寺山博之 (有コレクト・メディカ)、山川浩司 (日本薬史学会) の三氏は日本の医薬品に関する特許制度が物質特許に移行する 1976 年以前の製法特許であった時代の経験を報告した。消化性潰瘍治療薬シメチジンを取り巻く先発メーカーと後発メーカーの間で特許係争裁判があったが、このときに演者らは原告側の証人として原告、被告両者の主張する合成法により得られた試料に含まれる微量の反応副成物と市販の錠剤成分の比較を行った。実験は 1990 年に開発された高性能分析技術である (LC-MS/MS) による分析機により実験した結果、後発メーカーの特許侵害を証明した。
- O-09 南雲清二、佐々木陽平、滝戸道夫 (星薬科大学) は小笠原諸島が日本領土であることが国際的に認められた 1876 (明治 9) 年、政府は亜熱帯性気候を生かして、有用植物の殖産事業を推進するために、キナ、コーヒーなどを選び、キナはダージリンのキナ園から、コーヒー苗はジャワとセイロンから入手したことを「農務顛末」をしらべて明らかにしたことを報告した。
- O-10 成田研一 (鳥根県済生会高砂病院薬剤部) は現在、鳥根県の宍道湖にある大根島の特産品オタネニンジンの由来について、松江藩の名君、松平不昧公の時代、1804 年に安定した栽培に成功して「雲州人参」として知られるようになり、三瓶山麓でも栽培されて藩の財政を潤したと、三瓶山を境として西は石見国であったが石見銀山の地区は天領で、人参栽培を企図して代官所に申請したが、許されなかった事にまつわる話を報告した。
- O-11 溝口加奈子 (東京理科大学薬学部)、鈴木達彦 (北里大学東洋医学研究所) の両氏は日本での伝統医学的治療の特徴は、古典的治療体系よりも、既知処方の変応症に関する知識の集積が主で、江戸時代中期以来の「古方派」の流れを汲む発想法、とりわけ吉益東洞の所説が重視されて今日に及んでいることを説明した。彼の所説は実践第一主義で、初学者の容易に受容するところとなる一方で、伝統的古典の立場を逸脱する偏狭な場面もあった。
その学説を継いだ吉益南涯は、父の学説を補正継承すべく新たな理論を提出するのであったが、この間の経緯と評価についての考察を報告した。
- O-12 森田まゆ (東京理科大学 薬学部)、鈴木達彦 (北里大学東洋医学研究所) の両氏は中国医学古典に「血剂」として分類される薬物 - 当帰、芍薬、川芎、地黄の 4 品から成る処方「四物湯」は、そのまま、または、さらに他の薬物を加えて婦人科疾患や全身または局所的栄養不良状態に、日中両国とも用いていることを報告した。日本では更に金瘡薬 (刀・刃物による外傷治療剤) としても汎用されており、化膿性疾患のメカニズムが解らぬ時代に、生体側の治療力補強を目指した与薬法としても興味がある。本発表は基本処方学習の在り方をも示唆する内容であった。
- O-13 高橋春男氏 (財日本医薬情報センター) は 1960 年代よりの日本、米国、EU での医薬品安全対策としての副作用モニター報告制度の比較と 1990 年に日米 EU 医薬品規制調和国際会議 (ICH) が発足してよりの現状について報告した。
- O-14 五位野政彦氏 (東京海道病院薬剤科) は母校の図書館でたまたま手にした日本統治時代の『台湾薬学会誌』の 1935 年 9 月号に同会副会頭であった葛岡陽吉氏の追悼記事の中に自身が手術を受けたときの状況を漫画のように描いていたのを発見し、亡き葛岡氏のユーモア溢れる闘病生活に思いをはせたことを報告した。

ポスター発表の概略

P-01 川瀬清(日本薬史学会)、宮本法子(東京薬大)、小倉豊(日本薬史学会)の三氏

東京薬舗学校の創始者 藤田正方(1846-1886)の生い立ち、1868年に東京で医学校に入学し、卒業後は医師として病院に勤務して薬物治療の分野を担当していた1874年に「医制」が公布された。そのとき、「医薬分業実現」のために薬舗主(薬剤師)養成が必要と考えて1880年、「私立東京薬舗学校」の設立を政府に上申し開校後校長となったが、1886年雄志空しく伝染病で逝去した。



P-02 多胡彰郎(長岡実業)、宮崎啓一(三栄加工)の両氏

香料は8世紀より仏教儀礼に用いられていたが、16世紀後半に樟腦の生産が九州で始まり、明治期にはセルロイド原料として米国への輸出が拡大して製造業者は神戸に集中した。関東大震災の影響で薄荷脳製造業者も神戸に移って来た。この頃、道修町の薬種商も香料を扱うようになった。

P-03 上記二演者は道修町の薬種商から香料商を経て近代的な香料の製造販売会社へと発展した例を発表した。

P-04 石森靖啓氏(小樽エキサイ会病院)ほか5名の共同研究で、昭和初期、小樽市内の小学校での「誤薬事件」を機に『小樽市内小学校薬品準方』が発刊された。この図書は今では幻の図書となったが、発表者の一人吉沢逸雄理事が古書店で偶然に入手したという。また、この事件を機に学校薬剤師会制度の導入が進められた。

P-05 石瑛(東京理科大学薬学部)、鈴木達彦(北里大学東洋医学総合研究所)の両氏は古医書に従って、漢方薬を煎じて調整したとき過不足が生じることへの対応を論じた発表をした。

五史学会合同12月例会の報告

小倉 豊

12月に入ると秋が深まり、年の暮れのいそがしさに1年の締め括りを感じる。お茶の水の駅から会場の順天堂大学への道筋にも街路樹の落ち葉と、足早に歩く人波にそれを感じさせられる。毎年12月の上旬の土曜日(今年は12月11日)に開催される五史学会は、日本医史学会、日本歯科医史学会、日本薬史学会、日本獣医史学会、日本看護歴史学会の5つの学会が年に1回、合同で行う例会である。各学会から1名の演者が話題の演題



を発表するもので、興味深い研究や報告が多い。

本年、薬史学会からは、本会の理事の松本和男氏から「大阪・道修町の製薬産業史の一端－イノベーション・セレンディピティの視点から－」と題した演題を発表された。同氏は、日本における19世紀後半から20世紀における製薬技術の発展を、在職していた田辺製薬320余年の製薬技術の変遷を語ることで、革新的な新薬の開発にはイノベーションが必要であること、技術導入を含む技術革新によって品質管理と生産コストの削減を達成することが出来たこと、この技術革新には、「多様な好奇心」「技術と知恵の伝承」「先達の教え」など「歴史に学ぶこと」の重要性を強調されていた。

医学学会からは、九大大学院の教授で、ドイツ人のW. ミヒェル氏が、「日本独自の本草学の誕生について」と題して、上手な日本語で発表された。日本の本草学の誕生は、従来より貝原益軒の大和本草(1709年)にはじまるとされていたが、このことに演者は一つの疑問をいただき、17世紀後半、当時の幕府が長崎・オランダ商館に発注した西洋本草書の注文の意味や同じくオランダ商館員との長崎周辺での薬草採取の行事など、出島商館日誌や東インド会社の業務日誌などを駆使して、説明された。

日本の本草学が貝原の大和本草以前にすでに誕生していたことを、幕府の薬草の国産化や製薬技術の導入を含めた政策的な背景のもとに発展していったことを発表された。

歯科医史学会からは、来年度より歯科医の国家試験の科目に歯科医史がはいることになり歯科医師会として本年、夏、そのカリキュラム・ワークショップが開催されて、その内容が発表された。

「歯科医史教育カリキュラムプランニングの試み」と題して愛知学院大の石井拓男氏によると、ワークショップに参加した19大学のうち、昨年、歯科医史をカリキュラムに実施しているのは13大学であり、現状で何をどう教えるのか。教えるにあたってどういう問題があるのか、ワークショップで討論されたことを発表された。

日本獣医史学会からは、タイムリーな話題で「牛海綿状脳症(BSE)発生の経緯と対策」と題し、東大・小野寺節氏による発表があった。牛のプリオン病であるBSEの研究と対策について海外の発生状況、日本における発生の経緯、肉骨粉の販売禁止やトレーサビリティ、食品安全基本法など、日本政府の対応について最近の動きをわかりやすく報告されていた。

看護歴史学会からは、「看護歴史研究におけるプランゲ文庫の意義」と題して、慈恵会医大の大石杉乃氏の発表があった。

プランゲ文庫とはGHQの占領下におかれた1945年から1949年の間に国内で発行されたすべての出版物をGHQが検閲した後に、保管していた膨大な資料類である。新聞、雑誌、図書、パンフレット・ポスター、地図など数十万点に及ぶもので現在は、アメリカ、メリーランド大学の図書館に移管され、日本資料として公開されているそうである。このプランゲ文庫資料を用いた当時の看護分野の研究はまだ少なく、看護に関する雑誌、ポスター、パンフレットなどを調査、研究した結果を報告された。

主催側の発表では今年の参加者が約80名であった。分野の違った各史学会から、いつも興味ある発表があり、タイムリーな共通の話題や新しい資料の発見や提案があったり勉強になる例会であった。

第3回 日本薬史学会関西支部研修会の報告

日本薬史学会 関西支部世話人 宮崎啓一、多胡彰郎

さて、本年6月の第2回日本薬史学会関西支部研修会に続き、下記のとおり第3回の研修会を開催いたしました。

今回、関西大学大学院文学研究科で博士号を取得されました羽生和子先生にご講演いただきました。

また、前回同様にくすりの道修町資料館館長の宮本義夫様のご好意により会場をご提供していただきました。

記

日時：2011年1月22日(土) 研修会：16：30～17：30(懇親会；研修会終了後～19：30)
場所：くすりの道修町資料館 1階会議室 TEL 06-6231-6958
〒541-0045 大阪市中央区道修町二丁目1番8号 少彦名神社(神農さん)内
(大阪市地下鉄御堂筋線淀屋橋駅11番出口より徒歩約8分、堺筋線北浜駅6番出口より徒歩約5分)
案内図等につきましては、下記URLをご参照ください。
URL：<http://www.kusuri-doshomachi.gr.jp/map.htm>

内 容：

1. 研修会(話題提供)
講師：羽生和子先生(日本薬史学会・日本医史学会所属)
演題：「江戸時代、漢方薬の歴史」
2. 懇親会
研修会終了後～19：30
会費：5,000円(学生1,500円)
場所：ダイニングバー「キキ」
TEL 06-6209-7760
〒541-0045 大阪市中央区道修町二丁目2番11号
ベルロード道修町ビルB1



案内図

URL：http://www5b.biglobe.ne.jp/~freedom/kiki/k_main.html

北海道医史学研究会・日本薬史学北海道支部 第5回合同学術集会(報告)

北海道支部 関川 彬

「北海道医史学研究会」と「日本薬史学会北海道支部」が一緒になって医・薬の歴史を学ぼうと生まれた「合同学術集会」、昨年は10月2日(土)北海道医師会館において開催されました。この集会、第1回目に関り平成19年1月に開催されましたが、それ以降は毎秋開催の慣例になっており、今回は第

5回目となりました。集会に関わる業務は、両団体が1年おきに担当します。開催にあたり、医史学研の長瀬清会長、次いで、当会の斎藤元護支部長のスピーチがありました。

特別講演

特別講演は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの佐々木利和教授から「アイヌの生薬などー江戸時代の文献を中心にー」を伺いました。ロシアで発見された絵画で、江戸時代倭人が北海道に入って来た際の「蝦夷種痘図」を見ながら、当時、アイヌの間で痘瘡が多く、その予防として松前藩がアイヌに種痘を行っていたこと（当時の日本では種痘はまだ一般的ではなかった）やアイヌとの交易の話、アイヌの用いていた生薬が紹介されました。非常に興味深い内容のお話で、何れ一般公開講座でお話を頂ければと思いました。

一般講演

「医史学研究会」及び「当支部」からそれぞれ以下のような一般講演が報告されました。

(医史学研)

- (1) 竹田眞(竹田眼科)：眼目秘録について(第3報)
- (2) 菊田道彦(医史学研)・島田保久(元町整形外科)：「北征日乗」にみる北越植民社の医師達
- (3) 秦温信(札幌社保総合病院)・松岡伸一(同上)・佐藤文男(同上)・島田保久(元町整形外科)・鮫島夏樹(旭川医科大学)：関場不二彦『西医学東漸史話』について(第8報)ーカスパル流外科についてー

(当支部)

- (1) 小松健一(北海道薬大)・木村充博(木村回生堂)・吉沢逸雄(日本薬史学会)：後志の歴史(2) 倶知安町における薬品原料の栽培
- (2) 吉沢逸雄(日本薬史学会)：『小樽市小学校薬品準法』発見と概要
- (3) 本間克明(株ファーマホールディング)：新聞にみる明治期北海道の売薬広告(Ⅲ) 明治35-45年の売薬広告

時間が制限されているため発表が十分でなかったですが、内容の濃い、興味深いものでした。合同学術集会は医師や薬剤師だけではなく、北海道の医療に関わった先人達の足跡をたどるものであり、今後の発展が期待されます。

日本薬史学会東海支部第1回例会の報告

日本薬史学会東海支部長 奥田 潤

下記のごとく日本薬史学会東海支部第1回例会を開催しました。
多数の皆様にご出席いただき、ありがとうございました。

開催場所：内藤記念くすり博物館（館長・永縄厚雄）

〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1 Tel：0586-89-2101 Fax：0586-89-2197

開催日：平成22年12月5日（日）

10:00～12:00 館内見学、所蔵図書閲覧

12:00～13:00 薬膳弁当（1,500円）

13:00～13:25 総会

13:30～16:30 例会（研究発表）

研究発表：13:30～14:30 二谷智子（日本学術振興会特別研究員）

「地方資産家の生活と医薬－明治期の盛田久左衛門家を事例として－」

14:30～15:30 永縄厚雄（内藤記念くすり博物館・館長）

「明治の暮らしとくすり」

15:30～16:30 奥田 潤（名城大学名誉教授）

夏日葉子（三重大学大学院人文科学研究科修士）

「古代インドの薬学史」

連絡先：〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

名城大学薬学部教育開発部門

日本薬史学会東海支部事務局長 飯田耕太郎

Tel：052-839-2710 Fax：052-834-8090 Eメール：iida@meijo-u.ac.jp

第40回国際薬史学会の案内

第40回国際薬史学会は2011年9月14～17日の4日間に「薬学・薬業と図書」を主たるテーマとして、ドイツ連邦共和国のベルリンで開催される。今学会の公用語である、独、英、仏語で記述された小冊子（40頁）が日本薬史学会宛送付されたので紹介する。

会長：ドイツ薬史学会会長 Prof. Dr. Christoph Friedrich.

特別講演、関連集会、見学ツアー（7コース）が示されているほか、一般演題の募集が公告されている。口頭発表（10分）およびポスター発表（独、英、仏語による）

発表希望者は6月1日迄にアブストラクト／ポスターを送付すること（注意！Faxで送信したアブストラクトは受理されない）。ポスター用紙のサイズは縦130cm、横90cm。

参加希望者は日本薬史学会事務局に連絡して上記小冊子のコピーを入手して学会場、参加費、アブストラクト送付先を確認してください。

登録、問い合わせ先

Rotrand Mörshrer

Niedsty, 35

D-12 159 Barlin

Tel: +49 (0) 30 851 2507

Fax: +49 (0) 30 851 2507

E-mail: sakyetariat@bav-berlin.de